そこにあるもの、そこにないもの

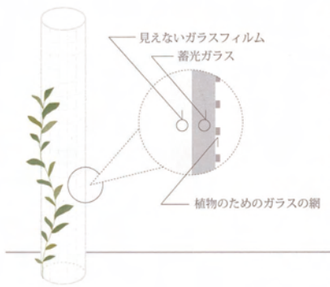
歴史的まちなみに、里山や田園風景に、そして私たちの日常生活に、
どこにでも存在する電柱。
生活に必要不可欠なインフラであると同時に、景観を阻害する要因となってきた。

電柱が見えなくなれば、まちなみは変わると思う。

蓄光ガラスに見えないガラスを複層させた、見えない電柱を提案する。
日中は景観に溶けこむ見えない存在となり、夜は日中に溜めた光によって道を照らす、
街灯としての見える存在となる。
見えない電柱は時間の経過とともに見え方が変化し、私たちの生活を支える。
見えなくなることで、小さな緑や空の広さを認識し、
守るべき景観の大切さに気づくかもしれない。
見えない電柱は私たちの生活を、まちなみという空間を豊かに変えていく装置となる 。

電柱のある風景

蓄光ガラスを用いた電柱の構造



通常の電柱にはコンクリートが用いられるが、この電柱は蓄光ガラスと見えないガラスフィルムによって構成されている。
蓄光ガラスを見えないガラスフィルムで覆うことによって反射を抑え街の風景に溶け込む。
夜は蓄光ガラスのやわらかい光が街の風景をつくり出す。

経年変化による新しい風景

植物が見えない電柱に絡み付くことで、そこに電柱が存在することを柔らかく示す。
時間の経過によって植物が育ち、新しい風景が生まれる。